

「アルブール論再考」をめぐって

2012 年 11 月 21 日 上村淳志

I 本稿について

- ・ 某査読誌に投稿中の論文
- ・ 論文中では「脱文脈」という言葉を用いていないが意識して書いていた

II 本稿と「脱文脈」との関係

1. 先行研究・文化批評の文脈

アルブール (albur) とは、表のテキストの裏に性的含意のある「二重の意味 (doble sentido)」を用いた、メキシコ的な言葉遊びである。特に、親しい男性同士の間で連歌のように「二重の意味」をかけあい続けて勝敗を決めるという遊び方——研究者からは「言葉の決闘 (duelo verbal)」と評される——が知られている。こうした男性同士の「言葉の決闘」において、アクティーボ (activo, “能動”) / パッシーボ (pasivo, “受動”) の二分法 (以下、A/P の二分法) が勝敗基準に用いられ、能動的な側を勝者と看做すことがある。そうした「言葉の決闘」で用いられる A/P の二分法は、男性優位主義の証左として批判されてきた。確かにその批判は、メキシコにおける女性差別や男性同性愛嫌悪の背景を示す点で意義があるが、アルブールを異性愛者男性だけのものとして理解してきた点に問題がある。

2. 同性愛者「運動」の文脈

A/P という用語は、男性同士の肛門性交を行う際に生じる役割——男性器を挿入する者 / される者——を指す語としても、男性同性愛行為に関心を持つ者の中で長らく使われてきた。だが、A/P という用語には優劣の発想がまわりついており、その発想を解体する必要があった。そこで、1970 年代に米国からメキシコに入ってきたゲイ (gay) というアイデンティティを受け入れた人達は、A/P の二分法に付着している優劣関係を攪乱する為に、A/P の役割を固定化せずに入れ替えるというやり方——「インテルナシオナル (internacional, “国家間の”)」と呼ばれる——を取るようになった。このやり方は、アルブールに関する文化批評をいくらかは踏まえて導入された。実際、同性愛者運動の担い手の中にも、アルブールに看取される A/P の二分法について批評を著してきた者がいる。

3. 運動から切り離された実践に見える「文脈」

メキシコの都市部に住むゲイ・アイデンティティを引き受けた人達は、A/P の二分法に付着する優劣関係を攪乱しながらも、性行為における役割を指す語としての A/P という用語自体は破棄しようとはせずに使い続けてきた。A/P という呼称をどのように変えようと、男性同士で肛門性交をしようとする限り、少なくとも相手や回ごとに男性器を挿入する者 / される者が生じ、それを確認する必要性が残る。そうした肛門性交における役割の好みを、性的指向や性役割の好みを知らない初対面の相手に対して尋ねる技法の一つがアルブールである。この型のアルブールは、「言葉の決闘」と同じように、最終的に A/P の役割を割り振られることになるが、勝敗を目的としていない。その意味で、政治的批判から切り離された「文脈」に置かれている。



アルブールをめぐり政治化の線引き